

使徒行伝におけるイエスの十字架の死

——キリスト論的ケリュグマとルカ福音書23章——

中山 貴 子

序

I 使徒行伝とルカ福音書23章との比較

- (1) テクストの確定
- (2) 演説（説教）
- (3) キリスト論的ケリュグマ

II キリスト論的ケリュグマとルカ福音書23章との比較

- (1) 2章23節
- (2) 3章13節b－15節a, 17－19節
- (3) 13章27－29節

結

序

ルカはマルコの受難物語を基本的には継承しながらも歴史的背景や教会の状況を踏まえて、それとは対照的な解釈によるイエスの十字架の死の叙述を行った¹⁾。しかも福音書でその叙述

1) マルコ15・33－39の十字架報知の型をA, ルカ23・32－43の十字架報知の型をBとすると以下のよう
な図式になる。

A イエスの十字架の死→神の子告白……復活

B イエスの十字架の死=παράδεισος→義人告白

復活表象→殉教の模範・模倣モチーフ

ルカ34a, 47によるイエスの十字架上の言葉の完全な書き換え, 39－43の改訂・拡大による悔い改めの
勧告と παράδεισος の約束, マルコの黙示文学的終末的色彩の希薄化, エリヤモチーフ, 嘲弄モチー
フの削除, 救済史的特色など。マルコにおけるイエスの十字架刑死の持つ逆説性よりも, 神への信頼を
中心にすえた殉教者の模範・理想像としての死であって復活・高挙がすでに先取りされている。拙稿「ル
カ福音書におけるイエスの十字架の死ーマルコ福音書15章33－39節とルカ福音書23章32－48節との比
較」広島女学院大学論集29集(1979), 「共観福音書におけるイエスの十字架の死」新約学研究10号(1982)。

を終了するのではなく、使徒行伝においてさらに発展させている。例えば、すでに明らかにした通り行伝7・54-60のステパノの殉教の死の叙述には、ルカ23・32-48が前提されている (Lk 23・34 a vgl Apg 7・60, Lk 23・46 vgl Apg 7・59 b)。そこではイエスの十字架の死がキリスト者の神への信徒 (Nachfolge) の模範、ステパノの死はそのイエスに対する信徒の模範という図式が、原始キリスト教の救済史的展開を福音書と使徒行伝の二部構成で著わしたルカの神学的意図に対応する形で強調されている²⁾。

そこで本論では、ルカが行伝においてイエスの十字架の死をどのような様式で叙述しているか、またルカ福音書23章の主要モチーフをどのように扱っているかを引き続き検討することにした。

I 使徒行伝とルカ福音書23章との比較

(1) テクストの確定

行伝においてイエスの十字架の死について言及している箇所は以下の通りである (7・54-60は除く)。

- | | |
|---------------|--|
| ① 2・23 | 不法の人々による十字架刑、神の計画と予知 |
| ② 3・13 b-15 a | ピラトによる釈放勧告、ユダヤ人による拒否、イエスの無罪性とバラバのモチーフ |
| ③ 3・17-19 | 受難の予告、無知のモチーフ、悔い改めの勧告 |
| ④ 4・10-11 | 十字架刑 詩篇118・22の引用 |
| ⑤ 4・25-28 | 詩篇2・1以下の引用、ヘロデとピラトによる謀略 |
| ⑥ 5・30-31 | 十字架刑、悔い改めのモチーフ、イエスの高挙 |
| ⑦ 7・52 | 正しい方を裏切る者、殺す者としてのユダヤ人 |
| ⑧ 8・32-35 | イザヤ53・7以下の引用 |
| ⑨ 10・39 b | 十字架刑 |
| ⑩ 13・27-29 | 十字架刑、預言の成就、イエスの無罪性、ピラトに対するイエス殺しの強要、十字架からおろすこと、埋葬 |

2) 拙稿「Nachfolge の模範としてのイエスの十字架の死—使徒行伝7章54-60節の解釈」同論集31集 (1981)。

	ルカ福音書 (イエスの時)	行伝 (教会の時)
信徒の対象	神	イエス
信徒者	イエス	ステパノ
イエスの栄光	預言 (22・69) (神の右に座するであろう)	復活 成就 (7・55) (神の右に立っている)

ルカ23章との対応は下記のようなになる。

基 本 的 要 素	行 伝	福 音 書
ピラトへの引き渡し、ヘロデとの共謀	①⑤	23・1-12
イエスの無罪性	⑦⑩	23・4, 14f, 22, 41
ピラトに対するイエス殺しの強要、バラバの釈放	②⑩	23・5, 18-25
イエス殺しについてのユダヤ人の責任	①②④⑤⑥⑦⑨⑩	23・1-25
十字架刑、イエス殺し	①②④⑥⑦⑨⑩	23・33, 44-46
受難予告、預言の成就	①③⑤⑩	23・44 ³⁾
無知のモチーフ	③	23・34 a
悔い改めの勧告	③⑥	23・39-43, 48
イエスの高挙（栄光）	④⑥	23・43 (22・69)
十字架からおろすこと、埋葬	⑩	23・50-56

以上の箇所はいずれも行伝の前半部分、内容的には Schneider のいうエルサレムにおける使徒の証言（2・1-5・42）を経て、ユダヤ、サマリヤ、異邦人伝道の開始（6・1-15・35）までに集中している⁴⁾。しかもその叙述様式はほとんどが演説に属している。例外は⑤の使徒たちによる祈祷と⑧のエチオピア人宦官によるイザヤ書の苦難の僕の歌の引用だけであり、⑦のステパノの演説、⑩のパウロの演説以外はすべてペテロを語り手としている。そこでまず、イエスの十字架の死を中心とする主要モチーフが演説（説教）の中でどのような様式で叙述されているかをみてみよう。

(2) 演説（説教）

ルカは、初代教会における使徒たちの宣教活動の中心的使信を最も効果的に劇的に叙述するために「演説」様式を用いている。演説は行伝全体の約 $\frac{1}{3}$ の分量を占めていることからルカの意図的な形成であることがわかる。おそらくは、当時のユダヤ教、ギリシャ・ローマの歴史著作者たちが、歴史の重要な転換点に参与した登場人物にその出来事の持つ意義を説明させるのに「演説」様式を好んで用いたことと無関係ではないだろう⁵⁾。

3) *ὥσπερ* はルカのための表現（3・23, 9・14, 28, 22・41, 59, Apg 1・15, 2・41, 10・3, 19・7）。マルコ15・25の時の知らせの削除により救済史における出来事として福音書全体を貫く「時」の理解に位置づける。拙稿29集134頁以下。

4) Schneider: *Die Apostelgeschichte* I, 1980 S. 66.

5) 例えば Tacitus: *Ann.* XI 24, Josephus: *Ant.* XV 5・3 *Bellum Jud.* I 19・4, I-III Makk, Thukydides: *Hist.* I 22, そのほか Xenophon, Herodot など。行伝の演説がより短いこと、賛否をめぐっての論議、思想についての修辞学的要素が欠けているなどの相違はある。Dibelius: *Aufsätze zur Apostelgeschichte*, 1968 S. 120-125. Schneider: *Apostelgeschichte* I, S. 97 Anm. 78, Weiser: *Die Apostelgeschichte*, 1965 S. 72-73.

周知のように行伝の場合は福音書の場合と成立過程が異なるため、前ルカの資料段階に属するものとルカの著作部分を明白に区別することは非常に困難である。ルカが全く何の資料も持たずに「演説」を形成したとはいえないが⁶⁾、演説全体に反映しているルカ神学の特色から、個々の伝承素材を用いながら現行テキストの「演説」を形成したのはルカ自身だといえる。このことは後述する。

24の演説(説教)を、語り手、聴衆、内容から、ユダヤ人対象A、異邦人対象B、キリスト者対象C、伝道説教a、弁明演説bとすると以下のように整理することが出来る。(○印は、イエスの十字架の死の叙述の含まれるもの)

1. 1・16-22	ペテロ	Ca	13. 15・13-21	ヤコブ	Cb
②. 2・14-36, 38-40	ペテロ	Aa	14. 17・22-31	パウロ	Ba
③. 3・12-26	ペテロ	Aa	15. 19・25-27	デメテリオ	Bb
④. 4・8-12, 19-20	ペテロ	Ab	16. 19・35-40	市の書記	Bb
⑤. 5・29-32	ペテロ	Aa	17. 20・18-35	パウロ	Ca
6. 5・35-39	ガマリエル	Ab	18. 22・2-21	パウロ	Ab
⑦. 7・2-53	ステパノ	Ab	19. 24・2-8	テルトロ	B
⑧. 10・34-43	ペテロ	Ba	20. 24・10-21	パウロ	Bb
9. 11・5-17	ペテロ	Ab	21. 25・24-27	フェスト	A
⑩. 13・16-41	パウロ	Aa	22. 26・2-23	パウロ	Ab
11. 14・15-17	パウロ	Ba	23. 27・21-26	パウロ	B
12. 15・7-11	ペテロ	Cb	24. 28・17-20	パウロ	Ab

この一覧表が示しているように、イエスの十字架の死の叙述は前半のユダヤ人対象の伝道説教に集中している(Aa 5, Ab 1 ステパノの弁明演説)。異邦人対象の伝道説教(Ba)は1個だけであるが、10・34-43のパウロの説教はルカ福音書の内容の要約的叙述として重要な箇所である。ただイエス殺しの責任問題を追求するルカにとって、直接の当事者であるユダヤ人に対

6) 古くは Harnack の資料分析、アンティオキア資料説の継承は Wendt, Jeremias, Bultmann など。Weiser は文書資料に属するものとして、1・13, 6・5, 13・1-3(名前のリスト), 3・1-10, 5・1-11, 9・32-43, Kap. 12, 13・4-12, 14・8-12(奇跡物語), 4・36f, 6・1-6, 11・26, 13・1-3(エルサレム, アンティオキアの教会生活についての個々の報知), 1・15-26(マツテヤの選びとユダの死についての伝承), Kap. 4-7, 12(使徒とステパノの迫害), 9・22, 26(パウロの回心と伝道のわざ), 8・26-40, Kap. 10(エチオピア人とコルネリオの受洗)をあげている。但し1-15章において一貫した長い文書資料を使用したというわけではない。Apostelgeschichte, S. 37. Klisch はステパノの演説(7・2-53)とアンティオキアにおけるパウロの説教(13・17-22)から、前ルカ伝承の救済史的信仰告白の再構成を試みている。神の民イスラエルの歴史における神のわざとイエス・キリストについて様式化された Credo のテキストがステパノ演説の基礎となり、その一部はパウロのアンティオキアにおける説教に使用されたという。13・23, 32f のダビデから救い主イエスに至るまでの部分を統一された伝承の結尾とみている。Das heilsgeschichtliche Credo in den Reden der Apostelgeschichte, 1975 S. 110-125. それに対する Schneider の批判は Apostelgeschichte I, S. 101.

する説教に集中するのは当然のことといえよう。

(3) キリスト論的ケリュグマ

このようなイエスの十字架の死を中心とした出来事が、ユダヤ人対象の伝道説教に共通して繰返し出てくることに Dibelius は注目して、これを説教の基本的シェーマとして理解した。説教のシェーマは、(a)具体的状況と結合している導入部分(b)イエスの生、受難と復活についてのケリュグマ(c)使徒の証人性の強調(d)聖書証明(e)決定的な悔い改めの要求によって構成されている⁷⁾。ただ必ずしもこの順序に従って展開されているわけではない⁸⁾。ルカ23章と対応するテキストで(2)の①の Aa, Ba の説教に適用した場合、Dibelius の分析に従って Schneider, Pesch が作った一覧表では下記のようなになる⁹⁾。

説教 シェーマ	2・14-40	3・12-26	5・29-32	10・34-43	13・16-41
(a)	14-21	12	29	34f	17-22
(b)	22-24	13-15	30f	36-42	23-25
(c)	32	15	32	39, 41	31
(d)	25-31, 34f	22-26	(31)	43	32-37
(e)	38f	17-20	31	42f	38-41

この中で、13・16-41の(b)は、内容からいって27-29、23-25は(d)に含まれるので、この点を修正しておきたい。

しかし、ペテロとパウロの説教(2・14-41, 3・12-26, 4・8-12, 5・30-32, 13・16-41, 14・15-17, 17・22-31)について、最も詳細な図式を提示しているのは荒井 献である。荒井の綿密な分析による一覧表から後述するイエスの十字架の死の叙述を含む最も基本的なテキストである2・21-40, 3・12-26, 13・16-41についてのみ取り上げてみる¹⁰⁾。

7) Dibelius: Aufsätze, S. 142, Formgeschichte, S. 15.

8) 例えば Pesch は、シェーマの(a)(b)の順序が説教全部に共通しているのに対して、(c)(d)(e)には転換がみられることから、これをルカの創作、あるいは単に概念的に伝承されたシェーマとしてではなく、前ルカ伝承の形成後にルカが編集上の改訂を行ったものとみている。Die Apostelgeschichte I, 1986 S. 44.

9) Dibelius: Aufsätze, S. 142 mit Anm. 2, Schneider: Apostelgeschichte I, S. 264f, Pesch: Apostelgeschichte I, S. 44.

10) 荒井 献: 「使徒行伝上巻」新教出版社1977, 183頁。

説教の内容 \ 章		2	3	13
a	呼びかけ	14 a	12 a	16 b
b	傾聴の訴え	14 b		16 b
c	聴衆の誤解の指摘とその訂正	15-16	12 b	
d	聖句引用	17-21	13 a	17-25
b'	再度の呼びかけと訴え	22 a	17	26 a, 38 a
e	キリスト論的ケリユグマ (ユダヤ人の告発)	22 b-24 (23)	13 b-15 (14, 15)	27-31 (27, 28)
f	聖句引用による証明	25-31	18	33-37
e'	キリスト論的ケリユグマの継続 (証人)	32-33 a (32)	(15)	(31, 32)
f'	聖句引用による証明の繰り返し	34, 35	20-24	
g	誤解によって引き起こされた問題への答え	33 b, 36	16	
h	悔改めの勧めと救いの宣言	38, 40	19	38-39
i	聴衆に対する約束の強調	39	25-26	26 b (40, 41)
j	説教の反応	41	(4 · 1ff)	42

荒井のこの一覧表でも明らかなように、十分に練った構成はルカによるものである。

Dibelius が “Die Reden der Apostelgeschichte und die antike Geschichtsschreibung (1949)”¹¹⁾において、あらゆる演説 (説教) の著者はルカであると結論して以来、ルカ説は定着してきている¹²⁾。それによれば、まず演説は行伝全体に万遍なく配置され、キリスト論的ケリユグマによる救済史的展開の進行役を務め、また初代教会史の転換点ともいえる重要な出来事の解釈者の役割を果たしている。歴史著作者たちによる演説との関連、LXX からの聖書引用、基本的シェーマがルカの時代の教会の典型的説教と一致することとあわせて、何よりもその完成した様式、周到な構成、全体を貫くルカ神学からも明らかであるという。さらに、Wilckens も 2-13章のユダヤ人対象の伝道説教にケリユグマのシェーマがあることに注目、これを伝承のより古層に属する原始キリスト教の神学的証言ではなく、ルカの神学概念の要約 (Summarien) としてルカ自身によって形成されたものとみなした¹³⁾。勿論それはルカが原始キリスト教の伝承素材を全く使用していないということではない。Wilckens も、申命記伝承によって形成されたヘレニストユダヤ人キリスト教会の説教のシェーマの影響を認めている¹⁴⁾。荒井も説教の背後に、ユダヤ人による預言者迫害に対する告発と悔い改めの勧告を主題とするユダヤ教の文学類型の存在、原始教団に遡る伝承断片が資料として用いられていることを否定

11) Aufsätze, S. 120-162 に収録されている。

12) それに対して Dodd は原始キリスト教の使徒的宣教に帰している。The Apostolic Preaching and Its Developments, 1936 p. 7-35. しかし荒井は、Dibelius, Wilckens, Kränkl によって行伝における〈説教〉が全体としてルカの構成によることは決定的に証明されたとみている。行伝、182頁、注31。ステパノの演説は例外。

13) Wilckens: Die Missionsreden der Apostelgeschichte, 1974³ S. 32-35, 186.

14) Wilckens: Missionsreden³, S. 205.

しない¹⁵⁾。例えば I コリント 15・3-9 の古い信仰告白定式, “ダビデの子孫から” の表現 (13・23 vgl Röm 1・3), “神がイエスをよみがえらせた” という定式化された表現 (2・23, 32, 3・15, 4・10, 5・30, 10・40, 13・30, 33, 34, 17・31 vgl Röm 4・24, 8・11, Gal 1・1), イエスの死と復活と救いの約束の結合 (Röm 4・24, I Thess 4・14) などとの関連も指摘される場所である¹⁶⁾。

ルカがこれらの伝承素材を改訂しながら, 自分自身の説教シェーマを形成したことは, 個々の説教のテキストにおいても確認することができる。そのことを, ルカ 23 章の主要モチーフを含んでいる典型的なテキストに絞って具体的に検討していきたい。

II キリスト論的ケリュグマとルカ福音書 23 章との比較

(1) 2 章 23 節

イエスの十字架の死についてのこの叙述は, 2・14-40 のペテロによる聖霊降臨説教のキリスト論的ケリュグマ 22 b-24 の中心である。荒井は擬古文, LXX からの引用 (修正, 加筆), 説教の内容と目的との間のズレ, 22 節以下の主要部分のキリスト論, 聖霊論, 救済論のルカ文書全体の思想的特徴との一致などから全体としてルカの構成に帰している¹⁷⁾。

そのことはルカ 23 章との対比によってもいうことができる。

① 聴衆

22 節 a の “Ἀνδρες Ἰσραηλῖται” の呼びかけは, 新約聖書において行伝にのみ出てくる (3・12, 5・35, 13・16, 21・28)。14 節の「ユダヤの人たち, ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた」¹⁸⁾, 36 節の「イスラエルの全家」と同様にユダヤ人全体を表している。しかもユダヤ人にとっては, 神の民としての自己理解, 救済史的意味を持つだけに, かえってその責任が問われることになる¹⁹⁾。εἰς ὑμᾶς, ἐν μέσῳ ὑμῶν がさらにそのことを強調する。これは, キ

15) 荒井：行伝, 180-184 頁。

16) 例えば Roloff は, 神によって派遣された義人や預言者がイスラエルの不従順のために捨てられ殺されるという旧約聖書・ユダヤ教のモチーフを継承してイエスの死を解釈した原始キリスト教団の伝承 (Mt 23・2ff, Lk 11・47, Mk 12・1-9, Apg 7・52 など) と比較しながら, 行伝の演説にはイスラエルに対する最も古い伝道宣教の基礎となったシェーマが資料となっているという。Die Apostelgeschichte, 1981 S. 50。ただ Haenchen が, テキストからだけではもはや再構成することが不可能なほどルカは自分の資料に様式上の改訂を施してしまっているというように, 伝承と編集・執筆部分を区別することは困難である。Die Apostelgeschichte, 1968 S. 72f。

17) 荒井：行伝, 180 頁。

18) Haenchen: Apostelgeschichte, S. 141. parallelismus membrorum であって, 2 つのグループを表しているわけではない。

19) Ἰουδαίος は, 一般に非ユダヤ民族との外交関係や公的な記録文書などに使用する非宗教的表示であって, 彼ら自身は Ἰσραήλ を用いる。共観福音書には Ἰουδαίος の名称が出てこない。ThWb III, S. 376-378, 387。

リスト論的ケリュグマに共通する「イエス殺し」におけるユダヤ人の責任問題を明確にするためのルカの用法である。福音書においても、イエスをピラトの所へ連行し、偽りの証言によって告訴し、「その人を殺せ」とさけび (18)²⁰、「十字架につけよ」と言い続け (21) ピラトに強要してついにその目的を達したのは、23・1〈群衆〉、23・4〈祭司長たちと群衆〉、23・13〈祭司長たちと役人たちと民衆〉であった。このことは、マルコ14・55〈祭司長たちと全議会〉、15・1〈祭司長たちは長老、律法学者たちおよび全議会と協議〉、15・11〈祭司長たちは…群衆を煽動した〉と比較するとよくわかる。またマルコ15・15-16と平行記事であるルカ23・25-26においても下記のように、マルコがローマ人兵士に言及するのに対して、ルカはこれを削除、一貫して指導者層と民衆とを合わせた〈ユダヤ人全体〉に対して問いかけてくる。

マルコ

ルカ

Παρέδωκεν τὸν Ἰησοῦν / τὸν Ἰησοῦν παρέδωκεν τῷ θελήματι αὐτῶν
 Οἱ στρατιῶν ἀπήγαγον αὐτὸν / ἀπήγαγον αὐτόν

② イエス殺しの責任

イエス殺しは *διὰ χειρὸς ἀνόμων*²¹ によって行われた。*ἄνομος* はルカ24・7 *εἰς χεῖρας ἀνθρώπων ἁμαρτωλῶν* と同様に、22・37b *μετὰ ἀνόμων ἐλογίσθη* (Jes 53・12) では律法を破る罪人の意味で用いられている。と同時に通常は、*ἄνομος* は律法を持たない者すなわち異邦人を意味している²²。行伝4・25-28には、ヘロデ・イスラエルの民、ピラト・異邦人たちがイエス殺しの共同責任者として言及されている²³。しかしルカにとっては、イエス殺しの主体的責任者はあくまでユダヤ人なのであって、異邦人（総督ピラト、ローマ人兵士たち）は彼らの単なる道具として用いられたにすぎない。無律法者たちを手段にしてイエスを殺したユダヤ人こそ律法を破る者、罪人であって真の *ἄνομος* である。ルカはマルコ15・16-20のローマ人兵士の嘲弄モチーフを削除、イエス殺しについての総督ピラトの責任を免除することで (Lk 23・4, 13-22) ユダヤ人の責任問題を追求している²⁴。従って *διὰ χειρὸς ἀνόμων* の表

20) *πομπληθεὶ* (*πάς+πλήθος* 全群衆で) は新約聖書における Hapaxlegomena で、この箇所のみ。

21) *διὰ χειρὸς τινος* の副詞句はルカが好んで用いる用語法。荒井：行伝、149頁、Haenchen: Apostelgeschichte, S. 143 Anm. 11 *διὰ χειρὸς* は LXX=Stil.

22) Haenchen: Apostelgeschichte, S. 143 Anm. 10 ユダヤ人の書いたものの中では、特にローマ人がそう呼ばれていた。ThWb IV 1079f.

23) Conzelmann: Die Apostelgeschichte, 1972 S. 35.

24) Kränkl: Jesus der Knecht Gottes, 1972 S. 102f. ルカにはローマ帝国との関係維持のためにイエスの死の責任をことさらユダヤ人にものみ負わせる傾向がある。Conzelmann: Mitte, S. 128-135, Schneider: Verleugung, Verspottung und Verhör Jesu nach Lukas 22・54-71, 1969 S. 193-196.

現によって、逆にユダヤ人の行為の罪深さが強調されることになる。

さらに、ἀναιρέω はルカの愛好語である（マルコは ἀποκτείνω を用いる、3・4、6・19、9・31など）²⁵⁾。イエス殺しにこの言葉を用いるのは新約聖書においてルカ文書のみである（Lk 22・2, Apg 2・23, 10・39, 13・28）。

行伝の演説におけるイエス殺害の諸用語を前ルカの教団のそれと比較検討した真山光弥は、ἀνείλατε <あなたがたがイエスを殺した>という第二人称複数能(自)動態によってイエス殺害を表す用例は、前ルカの原始キリスト教団、ヘレニズム教団の宣教用語ではなく、ルカのみが新約聖書・使徒教父文書において唯一この用法を使用しており、従ってこの用法はルカの手法、ルカの作品によるものであって、ユダヤ人全体に対するイエス殺害の責任追求を表すものであると論じている²⁶⁾。

このことは、ルカ23章におけるユダヤ人全体の責任問題の強調とも対応するものである。

③ 救済史的モチーフ

ユダヤ人のイエス殺しの責任追求と対照的に、それを神の救済計画として解釈するルカ神学が同時に強調されている。

イエスが、ユダヤ人に捨てられ殺害されることは（ἐκδοτος 新約聖書における Hapax-legomena）、神の定めた（ὀρίζω）計画（βουλή）と予知（πρόγνωσης）によるものであり、ここにはイエスの十字架の死を神の救済史的計画とするルカの解釈が示されている²⁷⁾。そのためルカは、例えばマルコ14・21の“人の子は自分について書いてあるとおりに去って行く”を、平行記事22・22で“人の子は定められたとおりに（ὀρισμένον）去って行く”に改変している。

以上のことから明らかなように、2・23のキリスト論的ケリュグマは一見、原始キリスト

25) 新約聖書24回の用例のうちルカ文書21回（z. B Lk 22・2, 23・32, Apg 2・23, 5・33, 36, 7・28, 9・23, 24, 29, 10・39, 12・2, 13・28など）、他には Mt 2・16, II Thess 2・8, Heb 10・9. Mk 14・1 ἀποκτείνωσιν→Lk 22・2 ἀνέλωσιν Apg 2・23 προσπήξαντες ἀνείλατε は新約聖書における Hapax-legomena の用法。

26) 真山光弥：「使徒行伝における反ユダヤ主義？—イエス殺害用語をめぐる—」金城学院大学論集1969年（39）。ἀπεκτείνετε（3・15）、ἐσταυρώσατε（2・36, 4・10）、ἀνείλατε（2・23, 10・39, 13・28）、διεχειρίσαθε（5・30）、φονεῖς ἐγένεσθε（7・52）を前ルカとルカの用語法とを比較検討しながら、ルカに反ユダヤ主義（Overbeck）、ユダヤ人告発の動機（Wilckens）が存在していたかどうかを扱っている。真山は、イエスを殺したユダヤ人に対する「あなたがた」という呼びかけの中にルカの時代の、行伝の読者も含まれているという。この点に対する荒井の批判は正しい。行伝、150頁以下。

27) 荒井：行伝、151—152頁。πρόγνωσης は新約聖書において他に I Pet 1・2, ὀρίζειν はルカ文書以外には Röm 1・4, Heb 4・7 のみで原始キリスト教会に遡るが、βουλὴ τοῦ θεοῦ（この他には Eph 1・11, Heb 6・17 のみ）と結合することでルカ固有の歴史観を表す。さらに προ- の用語法がルカの愛好語であることも指摘している。

教の古い信仰告白の様式をとりつつも、そのモチーフはきわめてルカ的であるといえる²⁸⁾。そのことは2・23と共通のモチーフを持つルカ23章の叙述内容が、マルコと比較してルカの編集部分であることから確認することができる。

(2) 3章13節b－15節a, 17－19節

3・12－26のペテロによる「ソロモンの廊」における説教は、12節の「イスラエルの人たち」と17節の「兄弟たち」の呼びかけによって、11－16と17－26の二部構成になっている。

① ユダヤ人の責任の追求

13b－15aはルカ23・1－25のほとんど完全な要約である。

- ・ピラトへの引き渡し 13b→23・1
- ・ピラトによるイエスの釈放勧告 13b→23・14－16, 20, 22
- ・ユダヤ人たちによる拒否 13b－14a→23・18, 21, 23
- ・イエスの無罪性の証言 14a→23・4, 14－15, 22, 47
- ・バラバの釈放要求 14b→23・18－19, 24－25
- ・イエス殺し 15a→23・24－25

παράδιδόναι は原始キリスト教のケリュグマの術語であるが (Röm 4・25, 8・32, I Kor 11・23), ルカ20・20の“総督の支配と権威とに引き渡すため”と同様に, *κατὰ πρόσωπον Πιλάτου* と結びつけているのはルカだけである²⁹⁾。ピラト (イエスの弁護人)－ユダヤ人 (イエスの拒絶者) の対比は, ユダヤ人によるパウロの投獄の場面にもみられ (Apg 23・29, 25・25, 26・31, 28・18), いずれもパウロには投獄や死刑にあたるような罪状がないことをローマ人が確認するという明らかに典型的なルカの意図的構成によるものである。

ὁμεῖς……παρεδώκατε, 14節の *ὁμεῖς ἡρνήσασθε καὶ ἠτήσασθε……* の型もユダヤ人のイエス殺しの責任を強調するためのものであり, 救済史に位置づけられた「イスラエルの民」に対してルカ23章の叙述を要約しながら, ルカは再びその責任を追求する。

② イエスの無罪性の証言

イエスは, *Τὸ ἅγιος καὶ δίκαιος* (4・27, 7・52, 13・28) であったにもかかわらず, ユダ

28) トロクメ:「使徒行伝と歴史」(田川建三訳), 新教出版社1969, 314頁。行伝演説の大部分の基礎にはルカよりも相当以前から存在していた「ケリュグマ的」図式がおかれていて, ルカは少なくともこの古い図式から示唆は受けているだろうという。しかしこの「ケリュグマ的」図式そのものもルカの技巧であると思われる。

29) *κατὰ πρόσωπον Πιλάτου* の *personalem Genitiv* の言葉は新約聖書において Lk 2・31, Apg 3・13, 16・9 に出てくるだけである。Bauer: Wb *πρόσωπον* IC δ S. 1430, 荒井: 行伝, 221頁。

ヤ人たちは彼を拒否して殺してしまった³⁰⁾。福音書におけるピラトの3回にわたるイエスの無罪性の強調は、マルコ15・1-15にはみられないルカだけのモチーフである。ルカはそれを23・15のヘロデの証言、39-43の特殊資料における犯罪人による証言、47節の百卒長の“*δίκαιος*”告白（マルコ15・39の「神の子」告白の改変）でさらに多様な形で展開している。イエスの無罪性についての倫理的告白から、さらには殉教者モチーフとの関係でイエスを義人＝メシアとする信仰告白にまで高められている。

③ 無知のモチーフ

17aの説教後半部分の開始にあたっての *ἀδελφοί* の呼びかけに、新しいモチーフがすでに反映されている。イスラエルの民全体に対するイエス殺しの責任追求は、神がイエスを死人の中からよみがえらせ、救いの約束を与える計画の中で新しい展開を迎える。*ἀδελφοί* は、いわばそのための和解の呼びかけである。

イエス殺しの責任追求は、ユダヤ人が“聖なる正しいかた、いのちの君”を拒否、十字架につけて殺した理由が *κατὰ ἄγνοιαν* にあることを明らかにしたのである。*ἄγνοια* のモチーフは、ルカ23・34aの十字架におけるイエスのとりなしの祈りとも対応している³¹⁾。この場合も *ἄφεις* の理由を無知のモチーフに求めている。背景には旧約聖書・ラビ文学における無知の罪と故意の罪の区別規定(Num 15・29-30, PsSal 9・4, IV Es 7・21-25, 8・36-60)の影響があるかもしれない。ユダヤ人が無知の罪にはゆるしの規定を設けているように、イエ

30) τὸ ἅγιος καὶ δίκαιος は、ἄνδρα φονέα 人殺しの男＝バラバ(Lk 23・19, 25)と対照されている。ここには、Apg 3・14の“聖なる正しいかたを拒む／人殺しの男をゆるすように要求する”，Lk 23・25“暴動と殺人の犯罪人バラバを要求通りにゆるす／イエスはユダヤ人に引き渡される”という共通のルカの図式がある。またイエス殺しに用いられている *ἀποκτείνω* は、荒井によれば元来はユダヤ教における預言者殺害の用語である(I Kōn 19・10=Rōm 11・3, Mt 23・34, 37, I Thess 2・15)。イエスの受難預言(Mk 8・31, 9・31, 10・34 parr)，受難物語(Mk 14・1 parr)でも用いられていることから、ユダヤ教を背景とした原始キリスト教団の論争用語として定着していたもの、ただその場合すべて第一人称または第三人称複数能(自)動態で、真山のいうように(注26) *ἀπεκτείνετε* の第二人称複数能動態をとっているのは確実にルカ固有の用語を示すものであるという。行伝、222頁以下。

31) Lk 23・34aの本文批判については、拙稿29集13頁以下、同31集180頁以下に詳述した。写本上の証言よりもルカ神学との関連を重視、その真性性とルカによる形成を認め、Lk 23・34aがApg 7・60のステパノの最後の祈りの言葉に継承されていると考える(注2)。但しルカの救済史的展開である「教会の時」にあっては、無知のモチーフはステパノの祈りから削除されている。ステパノ演説を聞いた後も悔い改めようとしないユダヤ人たちの行為は、*ταύτην τὴν ἁμαρτίαν* と明白に宣言されている。

	Lk 23・34a (イエスの時)	Apg 7・60 (教会の時)
祈る者	イエス	ステパノ
対象	神	イエス (<i>κύριε</i>)
内容	ゆるし	罪のゆるし
無知のモチーフ	○	×

スの十字架の死によってユダヤ人に対する決定的な審きが行われたわけではない。イエス殺しの理由が、彼らの無知にあること、イエスの死は神の計画と予知による救いであること、イエスによるユダヤ人のためのとりなしの祈りがなされていることは、彼らにとって悔い改めの可能性がまだ開かれていることを意味するものである。

④ 悔い改めのモチーフ

イエスの十字架の死が、神の救いの計画の成就であることから (18)、ユダヤ人たちには、イエス殺しの罪を悔い改め、神が遣わしたメシアであるイエスを受け入れることによって神の救いの計画にあずかるよう勧められている (19)。イエスの十字架の死によって悔い改めるというモチーフがルカの意図によるものであることは、ルカ 23・39-43, 48からも明らかである。特にルカ資料の 39-43 には、犯罪人 b (39) による犯罪人 a (40) に対する悔い改めの勧告とイエスの無罪性の証言があり、犯罪人 b とイエスとの対話には、イエスに対する信仰告白 (42) とそれに対する “今日、私と共に (*σήμερον μετ’ ἐμοῦ*)”, “パラダイスにいる (*ἐν τῷ παραδείσῳ*)” との約束がある³²⁾。このような犯罪人 b は、“最後の瞬間における悔い改めの模範”³³⁾ でもあって、人生の最後の瞬間に、しかも十字架上という極限の状況にあっても、なお人間にはイエスに対する信仰によって、真実の悔い改めを行うことを通し救いの約束を受ける可能性が残されていることを表している。ルカの形成した犯罪人 b のモチーフが行伝 3・19 に継承されている。但し、福音書においてはイエス殺しの理由となっている無知のモチーフによって、イエスの十字架の死によってもまだ最終的決定的な審きは下っていないが、行伝においては使徒の説教によって今やイエスのキリストであることが明白になった以上、無知にとどまることは許されていない³⁴⁾。悔い改めるか否かの最終的決断が求められている。ルカにとっては、無知のモチーフはすでに過去のものであり、ルカの教会の現在にとっては悔い改めを拒むことは自分自身に審きを受けることである。

以上のように、3・13 b-15 a, 17-19 は個々の内容がルカ 23 章の、それもルカ自身の形成になる部分と対応、それを要約もしくは発展させたものであることからルカの編集形成に帰す

32) ルカが Mk 15・32 b を全面的に改訂拡大、犯罪人 a, b の対照的な二通りのふるまいに書き換えている。詳しい論証は拙稿 29 集 139-144 頁。

33) Bultmann: Geschichte, S. 307.

34) Roloff によれば、Nichtkennen といえるか、Nicht-Kennen-Wollen なのではないか、安息日ごとにシナゴグで聖書を読むユダヤ人 (Lk 18・31, 24-25, 44) は知ろうと欲するならばいくらでもイエスについて知ることができたはずだとルカは考えているという。ただここでは過去の分析が問題にされているのではなく、説教によって見えてきた新しい状況の特徴が扱われている。説教を聞いた者は誰ひとりとして今後は、無知によって弁明することはできない。ユダヤ人にとっても、異邦人同様に “無知の時代” は過ぎ去ってしまったのである (17・30)。Apostelgeschichte, S. 76. Pesch: Apostelgeschichte I, S. 154f. 人間の無知と対照的に、神の予知 (vgl 2・23) が再び強調される。

ことができる。

(3) 13章27-29節

3・16-41のピシデヤのアンティオキアにおけるパウロの説教は、回心後シナゴグで行われた最初にして最後のユダヤ人への伝道説教である。パウロがこれ以降、異邦人伝道に向うことになる重大な転換点に位置している。

説教は16 a, 26 a, 38 aの聴衆への呼びかけで区別すると、大きく①16-25イスラエルの救済史の要約②26-37キリスト論的ケリュグマ・聖書証明③38-41悔い改めの要求による結びの部分になるが、内容的にはさらに細かく分けることができる³⁵⁾。⑥のキリスト論的ケリュグマから、ルカ23章に対応する27-29の部分を取り上げてみる。

① キリスト論的ケリュグマの Summarium

前述の(1)2・23, (2)13 b-15 a, 17-19に比べると、ここには確かに Pesch のいうように古い信仰告白定式の“死んで (27-28), 葬られ (29), よみがえり (30), 現われた (31)”のすべてが含まれているといってよい³⁶⁾。しかし、ルカの神学概念にはイエスが“わたしたちの罪のために死んだこと (I Kor 15・3)”という原始キリスト教の贖罪死の思想はない。イエスの死は神の計画と予知とによってあらかじめ定められ、ユダヤ人によるイエス殺しが、神の救いの計画、預言を成就させたとしても、それによってユダヤ人のイエス殺しの責任が軽減されるわけではない。「エルサレムに住む人々や指導者たち」(ユダヤ人全体)による無知のための(ἀγνοήσαντες)ピラトへのイエス殺し(ἀναπεθῆναι)の要求、イエスの無罪性(ユダヤ人の側からの)といったルカ23章に対応する特色が表れている。注目すべきことにはユダヤ人への伝道説教におけるキリスト論的ケリュグマにおいて、イエスの埋葬に言及しているのはこの箇所のみであるということである。従ってここにはいわばキリスト論的ケリュグマの Summarium ともいうべきものがある。そこで、29節の埋葬の記述がルカ23・50-56の埋葬物語とどのように関連しているかみてみよう。

35) Roloff, ①16-25救済史的概観②26-31キリスト論的ケリュグマ③32-37聖書証明④38-41結び Apostelgeschichte, S. 200, Weiser も同様, Apostelgeschichte II, S. 322, Schneider は細かくて16 a, 16 b, 17-22, 23-30, 31, 32-37, 38-41, Apostelgeschichte II, S. 129f Anm. 9, 荒井は本文の表参照。加山久夫は, ①16 a 聴衆への語りかけ②16 b 注意喚起③17-25救済史の概要④26聴衆への再度の呼びかけ⑤27-31キリスト論的ケリュグマ⑥38-39救いの告知を伴う結びの構成とする。前半の16-22はステパノ演説と, 26-31はペテロの説教のキリスト論的ケリュグマとの類似がみられ, 相互に交換可能のようにみえるところにもルカ神学の反映があるという。「使徒行伝の歴史と文学」ヨルダン社1986, 317頁。説教については, Wilckens によれば, ユダヤ教のシナゴグにおける聖書解釈, 申命記的回心説教の影響を受けてはいるものの全体的な構成はルカのものである。Missionsreden, S. 221f.

36) Pesch: Apostelgeschichte II, S. 37.

② 埋葬モチーフ

ルカ福音書の埋葬物語そのものについてはすでに論証しているため³⁷⁾、ここでは扱わないで、行伝13・29との対応の問題についてのみ取り上げることにする。13・29はルカ23・53と *καθελόντες/καθελὼν, ἔθηκαν εἰς μνημεῖον/ἔθηκεν αὐτὸν ἐν μνήματι* と言語上はほぼ一致すること、また“木から”(ἀπὸ τοῦ ξύλου) は5・30, 10・39bの“木にかけて”(ἐπὶ ξύλου) を受けていること、τελέω はルカ2・39, 18・31, τὰ περὶ αὐτοῦ γεγραμμένα はルカ7・27, 18・31, 21・22, 22・37, 24・44と対応することからもルカ自身の形成とみることに問題はない。問題なのは、埋葬者であるアリマタヤのヨセフ(女たちのモチーフも含まれるが)が欠落して、ユダヤ人(26a “エルサレムに住む人々やその指導者たち”)による埋葬として叙述していることである。叙述そのものがシェーマ的で非常に簡潔であるのは、キリスト論的ケリュグマ様式からいっても当然ではあるが、前述したようにルカ23章の主要モチーフがたとい最短の形であっても盛り込まれていること、またヨハネ福音書も含めてすべての福音書がアリマタヤのヨセフモチーフを保持、しかも拡大していく中でこの欠落は問題とってよい。ルカが共観福音書伝承とは異なった見解を持つ伝承を採用したということは考えられないので、そこにはルカの意図が働いていなければならない。この点について多くの注解者は、ケリュグマ的図式という制約のためとみている。例えば Haenchen は、このような厳密とはいえない表現は、ルカができるだけ凝縮した表現や文法上の単純化を意図したためであるという³⁸⁾。あるいはまた Kränkl のように、後述するイエスのよみがえりの前提としてイエスの死の現実性を強調するためと考えられている。ルカにとって重要なのは埋葬の事実 (Faktum) だけであって、誰によって、どのようにして行われたかということは問題ではないという³⁹⁾。

しかし、ルカがアリマタヤのヨセフモチーフを削除しているのは、ケリュグマ的図式といった様式上の理由からだけではない。ルカがキリスト論的ケリュグマにおいて、一貫して追求

37) イエスの十字架の死と埋葬物語の問題については、拙稿「イエスの十字架の死と埋葬物語—マルコ福音書15章42—47節の解釈」広島女学院大学論集32集(1982)で共観福音書の埋葬物語を特にその基礎となったマルコ福音書を中心に取り上げ、それと対比する形で「イエスの十字架の死と埋葬物語—ヨハネ福音書19章31—42節の解釈」同34集(1984)においてヨハネ福音書の埋葬物語の特色を取り扱い、福音書全体の考察を「イエスの十字架の死と埋葬物語」『新約聖書と解釈』所収(新教出版社1986)で試みた。イエスの十字架の死の問題が埋葬物語にどのように反映しているかを、埋葬物語の主要モチーフ(埋葬モチーフ、アリマタヤのヨセフモチーフ、女たちのモチーフ)を中心に論証したものである。

38) Haenchen: Apostelgeschichte, S. 352, 同様に Conzelmann は、物語ではなくケリュグマの様式を用いているため、出来事についての短い単純な要約が扱われることになったといっている。Apostelgeschichte, S. 84.

39) Kränkl: Knecht, S. 117. そのほかに Roloff: Apostelgeschichte, S. 206, Pesch: Apostelgeschichte II, S. 37. 神のわざとしての復活の言い表しと Kontrastschema になる形で叙述するためである。

してきた問題はイエス殺しについてのユダヤ人全体の責任を明らかにすることであった。福音書においては、埋葬は栄誉と尊厳にみち、復活の光を予兆させる形で叙述されている。それに対して行伝13・29では、埋葬はユダヤ人のイエス殺しの完成にはほかならない。ユダヤ人の罪の結末として埋葬を叙述しようとする時、最高法院の議員でありながら、その議決と行動に同調しないで神の国を待ち望む善良で正しい人 (*δίκαιος*) であるアリマタヤのヨセフによる埋葬は (Lk 23・50f), ルカの意図に即していないことになる。そのためにルカはアリマタヤのヨセフモチーフを意図的に削除したのである。

結

ユダヤ教からイエスを信じる信仰へ、初代キリスト教史にとって重要な転換点となるユダヤ人伝道 (異邦人伝道) の意義を解釈するために、ルカは「演説 (説教)」様式を用いてその中心にキリスト論的ケリュグマをすえた。その内容・構成はルカ自身による。

(1) キリスト論的ケリュグマ (およびそれに伴う基本的シェーマ) のほとんどは、ルカ福音書23章と対応している。すなわちキリスト論的ケリュグマは、ルカ福音書23章のイエスの十字架の死を中心とした叙述の要約 (*Summarium*) といつてよい。

(2) ルカが、特に一貫して追求している問題は、福音書と同様にイエス殺し (十字架刑死) についてのユダヤ人全体の責任追求のモチーフである。そのためにルカの埋葬物語の最も重要なアリマタヤのヨセフモチーフは削除され、埋葬もイエス殺しの完成を表すものとなっている。

(3) ユダヤ人によるイエス殺しの責任追求と同時に、*Kontrastschema* として繰り返し主張されていることは、イエスの死が神の救いの計画の成就であるという救済史的視点である。

ルカ福音書におけるイエスの十字架の死は、初代キリスト教史 (使徒行伝) において宣教の内容として継承されていくのである。

Zusammenfassung

In den Missionsreden vor Juden in der Apg gibt es das christologische Kerygma über den Kreuzestod Jesu: 2・23, 3・13b-15a (17-19), 5・30f, 10・39, 13・27-29.

Lukas hat das christologische Kerygma in der Apg entsprechend Lk 23 sehr schematisch ausgebaut.

- | z. B. Apg 13・13b-15a (17-19) | Lk 23 |
|--|--------------------|
| • die Auslieferung Jesu an Pilatus 13b | → 23・1 |
| • die Befreiungsforderung Jesu von Pilatus 13b | → 23・14-16, 20, 22 |
| • die Verneinung der Juden 13b-14a | → 23・18, 21, 23 |

- der Hinweis auf die Unschuld Jesu 14 a —————→ 23 · 4, 14–15, 22, 47
- die Befreiungsforderung des Barabas 14 b —————→ 23 · 18–19, 24–25
- die Verantwortung der Tötung Jesu von den Juden 15 a —————→ 23 · 24–25

Das christologische Kerygma in den Missionsreden vor Juden ist als ein “Summarium” des Lk 23 aus der theologischen Konzeption des Lukas gebildet.